

This image is a comprehensive travel guide for Swiss Waterfall Hiking, covering various routes and attractions in the Alpine region. The top section features large, colorful headings for "Swiss Waterfall Hiking" and "Jungfrau". Below this are detailed maps of the Matterhorn area, the Jungfrau region, and the Zermatt region. The central part of the brochure contains a large photograph of the Matterhorn reflected in a lake. To the left, there's a promotional banner for a 95.9% discount on travel packages. The right side includes a QR code, a smartphone access icon, and a schedule table for the 9-day tour. The bottom half of the brochure is filled with smaller sections about different hiking routes, including the "Alps 4 Great Peaks" exhibition and various waterfall hikes. Each section includes maps, elevation profiles, and contact information.



◆ プロローグ

「2日しかなかったから…。もっとあつたら、かえって迷ったかもしだんけど」と、トッコさん。

スイスでの最後の晚餐にて、しばしのご縁がもうすぐ切れる…この100万円近い出費の旅には、どうご縁があったのか?の話題になってきた。

手続きしたのは10月のことだ。その春、ドロミテ・チロルハイキングの申し込みが、(クラツーが成立しなかったため)出遅れ、5月末の初回の催行で妥協したら、吹雪の峠越えに、ハイキング路はまだ封鎖など散々な目に遭ってしまっていた。それに懲りて、念願のスイス6月下旬発を、パンフに載ったなりに申し込んだ。これで直前までは放念…のはずだった。それが、3月26日にはさっちゃんの心房細動発症キャンセル、5月14日には、啓子ちゃんの癌発覚キャンセルという事態になった。

一人参加でも行くつもりではあった。いつ、自分にも、病魔や不調が訪れるかはわからないのだから。

ただ、一人部屋利用での追加が19万円もすること、半年前でも押さえにくいのが花のスイス旅であること…には、ひつかかった。



《ゴマフレンドウとベルニナアルプス》

それが、5月24日、加賀友禅検定の合格祝賀パーティーが、駅前のANAクラウンプラザホテル金沢であり、同日、隣の金沢市アートホールにて、トッコさん招待の錦心流琵琶演奏会がある…となった。スイス無料キャンセルの期限が5月27日であった。

迫ってはいるが、確保できている部屋が、本来の二人利用になり、プラス1名確保なら、阪急にだって歓迎の話になるはずだ。どちらへ転ぶか?はそれこそご縁任せとして、この際、トッコさんにツアーのコピー

を渡し、声掛けはしてみよう!

楽屋から出てきたトッコさんは、「4月のギリシャは、地震でキャンセルになり、6月のスロベニアは友人の相棒の発病でダメになっていたの。今年はどこも行けないんだと諦めていたわ」とのこと。「スイスは憧れてはいるけれど…。富士山も高山病で2度リタイアしているし、自分には行けない国と思ってきた」と。私は「スイスでのハイキングというのは、上りはロープウェイを利用して、下りて来る方だけ。超高所のロープウェイは、展望台に短時間滞在するだけ」とざっと話し、「あとは検討してみて…」と、渡してきた。

26日朝、電話をかける。彼女は高所にまだこだわっていた。私は、ハイシーズンのスイスが押さえづらいことを重ねて言い、まずはパスポートを持って、阪急北陸支社に行き、今の段階で参加が可かを聞いてこよう!と提言した。さらに、私があらかじめ用件の電話を支社に入れると、「部屋はいいのですが、飛行機の座席の発注がもう終わっています。座席が確保できるかは、手配会社の返事待ちになります」とのことだった。1時間後の支社窓口でも同様の返事ではあったが、仮申し込みはしてきた。2日後、「手配できました」になつた。

まさに、トッコさんには、「2日しかなかったから、迷う時間もなく」、突然スイスへGOになったのだ。

ご縁があるものなら、そうなる。



《グラキアリス・キンポウゲ》

多くの人には100万円の参加費用が、まず問題になるのかもしれない。しかし、物を増やすらず、時間潰しには関わらず、働けるうちは働き、健康寿命を延ばせば…万一用貯蓄は減額できて、その差額で、見たい世界への旅を実現できる。お金は、そのように確保し、夢のために使うものだ。それが、5/29~6/4の中国・

张家界に続く、今回の 6/27~7/5 のスイスとなっているわけだ。

この連続外遊を夫に告げたのは、大谷が 1 試合 2 本墨打を打った 6 月 15 日のこと。「大谷が 2 本打つということは…私の、6 月に 2 回外遊もありよね！」の訳の判らない理由で宣言。

「あそこが痛い、ここがおかしい、眠れない」の不調を言いつぱなしで、眉間に皺寄せた妻より、「ありがとう！行ってくるわ！」のご機嫌な妻の方が、ずっといいではないか！

さて、スイスは 2012 年に出かけている。それはオートルート（高い道）というもので、予備知識などなかったが、ATS 社のツアーでは、最難関ランクになっていたことでの選択だった。まだ元気だったその頃は、わざわざ大枚払うなら、行きにくい所を選ばないと、もったいない！の考え方をしていた。



『2012 年 7 月シャモニーとモンブラン山塊』

それは、「モンブラン(4810m)に見送られ、マッターホルン(4478m)を迎えてもらうというドラマティックなストーリーが人気のコース」で、100 年以上の歴史あるスキーツアーコースのこと。それが、無雪期には、11 か所の 3000m 近い峠と谷を踏破する総距離 180km の山岳トレイルとしても、楽しめている。そのうちハイライトの 6 つの峠部分を 8 日間で越える、全 12 日のツアーだった。

相応の満足をしたもの、地図を見れば、九州をやや小さくした程度の国の南端を少々歩いていたに過ぎなかつた。

グリンデルワルトやユングフラウというベルナーオーバーラント地区や、内田良平氏が所属していたベルニナ山岳会のベルニナアルプスなどを、まるで知らない、見ていない！

また、あの頃は、あまりの完備ぶりに、アミューズメントパークのよう…という否定感をもつた。苦労してこそ得られる大展望が、正当な山であるべきで、こんなのはずるい！金儲け主義！とも思ったのだ。でも加齢した今は、文明の利器に助けられたい。快適に絶景を楽しんできたい。さらには、フラワーハイキングが何本か入っているものではあってほしい…。

ぴったりが、阪急の「スイスフラワーハイキング」だったのだ。



『モンタヌム・ダイコンソウ』

1 週間前の、「出発前の最終便」に、初めての「トランク割引券」がついてきた。阪急にはそんなサービス（料金の内とはいえるものの）はないものと思っていたので、100 万円近いと、つけるのかな？と勘ぐった。

ただ、こちらは、もうトランクを小さくして、宅配を頼まず、持ち歩く…に変えた。直前まで荷物の出し入れがやれるし、軽量対策が、加齢対策でもあった。

トッコさんも直前にトランクが壊れ、手持ちの二回り小さいトランクにせざるをえなくなった。そのサイズのお蔭で、皆さんには「旅慣れた人」の評価を受けたが、小柄なトッコさんは、手荷物ザックは大きめを一つ、軽登山靴を普段履きに常用の対応もしていた。

添乗員からの事前電話はなかった。今回は在宅で丁寧掃除に励んでいたので、不在のはずがなかったのだが…。最近行った、中国も、アメリカも、固定電話の方にかかるついて、そうだったと意識すらしなかったのに…。藤田添乗員は、「携帯にかかるない」まで済ませ、トッコさんに「依頼で済み」としたらしい。彼女は彼女で、「つい最近も中国へ行ってきたばかりのベテランだから（特に、説明がなくても）大丈夫」と請け合つたらしい。

「しかるべき善処をしていない！」と私の評価は、

「下がる」。個別支払いをしているのだ。17人分の連絡が大変だからといって、夫婦ペアでない片方の連絡を、端折ってもいい…の解釈にはならない。



『アルプス三大名花 アルペンローゼ』

◆6月27日（金）金沢～関空

16時、トッコさんと金沢駅で落ち合う。まずは、新幹線用待合室に移動する。

彼女は春先、100歳で亡くなった一人住まいの叔母の遺産整理に忙しかったらしい。その贈与先が90歳の長姉であって、まだ頭は働くらしいが、いちいちトッコさんと次兄が付き添わねば物事が進まない。その件で、つい先日、三人で大阪へ出向いたばかりという。その時初めて、北陸新幹線用のこんな待合室があるのを知ったそうだ。ご縁がなければ、あっても知らない…は、待合室であれ、スイスであれ、一緒だ。

ともあれ、山友とはあまり下界の話をしないのを常識にしてきた。だから、今回初めて、「父の弟と、母の妹が結婚しての叔父・叔母」で、子なしだったから、トッコさん兄妹が深くタッチになる…を知った。遺言もあったらしく、そうでなければ、単なる叔母・姪で采配できない話ではある。私も、伯父の弟、伯母の妹同士が結婚した経緯の両親だった。

家長が「家」を仕切る時代、若者同士は結婚させるものだった。子だくさんで、親戚付き合いもいちいち大変な時代には、それこそお里も気心も知れているし…と、見える範囲内で適齢期同士を気軽にくっつけたようだ。そもそも、長男が全財産を引継ぎ、老親と子女を扶養する…家督相続の時代だった。

封建社会には功罪があるが、義務と権利が一致していた面もある。血のつながった伯父伯母の本家で、従兄弟達とは兄弟同然に遊び、愚痴話とは無縁できたせいで、私には、親戚が厄介という先入観がない。

それが、婚家では義母や負債を押し付けられ、貧乏

籠ばかりとなつた。もう少し、「親族とは争族」の予備知識と覚悟があったなら…。でも、末っ子の嫁にどれだけの手が打てただろう。

ともあれ、それらが下地になり、巡り巡つて、晩年のおじいさんは留守番をし、おばあさんは大手を振つて、旅に出ているわけだ…。

さて、30番線からの「はるか」も、エレベーターであがつての国際線ターミナルへもスムーズ。夜の空港は、基本、空いている。金沢で両替できなかつたスイスフランへの両替をまずやる。50CHF=9885円だつた。

藤井聰太によく似た名前の「藤田創太」君は、就職3年目のまだ初々しい青年だった。コロナだ、AIだとこちらの目が回っているうちに、添乗員も、我が子の世代を越して、孫世代に近くなつてゐる。

前回の中国の時の壮年添乗員は、はしご添乗で詰まつていたせいか、ろくに配布物を用意していなかつた。あげく注意事項を口頭で次々並べるものだから、早々に「『〇〇するな…』ばっかり！」とおば様たちの不興も買った。

その点彼は、そつなく、基本注意事項をまとめ、パンフにしていた。それを渡して、各自に念押ししてもらえば済む話だ。そんな「基本の注意事項」の他に、毎日の「確認事項」の紙と、「出国から到着までの流れ」と。垣間見ると、メモや配布物などを、ラベルをつけファイル化してあり、マイクでの事前案内を含め、よくやっていた。そんな余裕が、さらなる気配りの余裕にもつながつてゐる。

若い子はいい。伸びしろがある。電話連絡の件での減点はさておき、「おお、使えそうな人材！」の評価になつた。



『アルプス三大名花 アルピナ・リンドウ』

今回の17名は、男性ペアが1組、女性ペアが2組、女性3人が1組、夫婦が4組…の内訳だった。

男性ペアは、絶景撮影が趣味で、片方は陽気な発達障害か？はしゃぎ方が年齢不相応の子供レベルだった。絶景大判写真を部屋中に貼って、大感激を反芻しているそうだ。相棒の健常人にはカバーの手数がかかっていたが、その天真爛漫さが気楽と思えるタイプか？あるいは財産管理が絡んでの委託された関係なのか？までは不明。

女性ペアは元々がテニスのグループで、そこから何名か都合の付く人同士で、海外旅行に出ているそうだ。

若めの女性3人の方は、やや個性派か？高校の同窓生らしかった。家族持ちの気配はなかった。

夫婦の方は…近郊花卉農家をやっている夫婦、息子に会社を譲ってきた夫婦、テニス三昧らしい夫婦、歳の差11歳の上司だった云々…。直前の中国での夫婦4組と比べて(比べるのが、そもそもおかしいのだが)、奥様が、幸せ一杯を大発散！が、違いといえそうだ。なるほど、夫婦で200万円出費のスイスに出て来られるというのは、「当たり籠の人生なのよ！」…になるんだなあと気づかされたくらい。「スイスに来ているのよ」写真を代わる代わるに撮りあい、ペアでもポーズを決めて撮ってもらい…風光明媚で、高級山岳リゾートのスイスは、まさにそんな幸せ向きともいえた。

私がかつて行ったオートルートは、ハードなトレッキングだったから、全員が一人参加だった。でも、山の話が通じて、山としてのスイスを味わおうとしていた。今回は、観光レベルスイスを選択したのだが、参加者を見て、「違う」を再確認したのだった。

大阪や神戸の方ばかりであり、まず「金沢から」を告げると、「金沢からどうやって出てきたの？」「地震はどうだったの？」と聞かれた。敦賀乗り換えで、関西人にはかえって不便になり、遠くなつた。そんな関西都会人には、田舎金沢と高級山岳リゾートスイス…がどうも繋がらないようだった。阪急北陸支店から、「『金沢駅発をくつつけた』関空発スイスツアー」のチラシが出て、目に留まったのは、会社の「営業努力」のうちなのだった。

中東系航空会社の出発は、なぜか深夜だ。それは「集合が、会社帰りでもOK」の言い方で、宣伝されてもいる。物は言いよう…。

そうであっても金沢の田舎からなら、16時発で出てこねばならないし、有休をとらねばならない。

エミレーツはエアバスを利用して、搭乗も二段構え。上の階はファーストクラスになるからか、搭乗ゲートも、ターミナルの端の端（弱小航空会社か、小型便かの場所）にはならない。だから便が込み合う昼間利用ではなく、夜間発着側になる「住み分け」をしているのかもしれない。

翼の上を押さえているらしい団体客の私達は、横が、4—4—4の配列のあたりであり、通路側席を隣同士でとつてある。アメリカの時のツアーは、24時間前から、有料で席を確保できる…となっていて、そんな時代になったのか！だった。でも、それは最先端の話であって、まだ各航空会社はバラバラ対応のようだ。



《ヨウシュ・ユキワリソウ》

◆6月28日（土）ドバイ～チューリッヒ～
マイエンフェルト～サン・モリッツ

アラビア語、英語、日本語の機内設備説明を聞く。でも、映画は、さっさと言語を選んでしまえばいい。『アバター』を見た。ながら鑑賞を含めたら、4回目あたりかもしれないが、今回は、張家界がモデルというのはどのシーンかを確認のつもりで見た。岩峰は宙に浮いていて、モデルそのものではなかった。

そう言えば劇場映画をずいぶんと見に行っていない。無難に、ディズニーものから、『ファイティング・ニモ』『ムーラン』『実写版白雪姫』を選んだ。擬人化しての滑稽さも食傷気味なら、中国北方民族系の男装して父の身替わりになって闘う…も、種切れ気味。白馬の王子様とめでたく結婚にも、なんと単純な人生

観！になる。エンタメは目新しさがなくなるし、いかんせんおとぎ話と興醒めになるのは、加齢の副作用もあるのだろう。

10時間のフライトは、2回の機内食と、映画で過ぎた。時計はマイナス5時間。時差ボケをおこさないコツは、「日本では〇時」の読み替えをしないことと、起きている時間を長くして夜で一挙に調節をする…あたりらしい。

ともあれ、映画夜更かしをして朝のドバイには着いた。広い免税店スペースを通過し、モノレールに乗り、次なるエミレーツへ。ここから、ドバイの高層群は見えない。「トラピックス」の旗は、他に赤と青の2種の団体があって、営業努力のとおり、ジャンボ機のいいお客様になっているようだった。



《ベルニナルプスでのハイキング》

乗り継いで、さらに時計はマイナス2時間、6時間40分の搭乗でチューリッヒ。

閑空で預けたトランクを無事確保して、バスに落ち着いたのは15時。ミックさんの運転での2日間の始まりだ。17人での大型バス。広々と一人座りにさせてもらった。

スイスの首都は西端のベルンだが、チューリッヒの方がスイス最大の街となる。国際的な金融と商業の中心地だが、素通りである。

藤田青年から、スイスの説明が始まる。

スイス連邦は26州から成り立ち、赤の地に白十字が国旗。ハプスブルク家との独立戦争の際の赤色の旗に、キリストの十字を加えたものらしい。赤十字の旗は、スイス生まれのアンリ・デュナンへの敬意として、紅白を逆転したものを使用し、ちなみにイスラム圏は、十字のかわりに三日月を使用している。

公用語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、これに、ラテン語に近いロマンシュ語の4種であり、各州で異なる。

スイスフラン1CHFは190円、物価は高く、初任給は50万円、時給は4000円。ちなみに物価の比較として、ビッグマック指数というのがあるが、スイスは1位で1200円になる（日本は480円）という。

昔からの鉄道網を大事にし、年間パスで安価な利用を図り乗車率を上げもすれば、トンネルを核シェルターに解釈という手堅い利用も考えているそうだ。

以下は私が、勉強した知識。

貧しい山岳国は、傭兵という出稼ぎで食い繋いでいた。堅実で我慢強く働き者のスイス人傭兵は引っ張りだこで、スイス人同士が外国で戦う場面もあったという。それが、後に武装中立の考えにつながり、永世中立国の始まりとなった。

農業と牧畜の国は産業革命での繊維産業から、精密機械産業、さらには山岳観光立国を目指し、トンネルや鉄橋などの設備を整えていく。

第2次世界大戦では、同盟国に囲まれ、狙われたアルプス越えルートを断ち切るため、自ら諸設備の爆破を宣言。それがドイツの侵攻を遅らせ、中立のままかろうじて終戦を迎えた。中立信念のままEEC参加も国連参加も拒否してきたが、時代の波は押し寄せ、2002年に国連加盟、2008年にはシェンゲン協定加盟国となっている。

スイスには徴兵制があり、一定期間兵役に就くことを義務としている。戦争器材を開発し、輸出側になっている。スイスの中立・平和は筋金入りなのだ。

日本の、「戦争放棄」とすれば戦禍に巻き込まれず、「平和」でいられるはず…は理想的すぎ。究極、善意任せだ。結局馬鹿にされ、脅され、お金でうやむや妥協させられている。「大衆は被害者だ！」「戦争は厭だ！」を叫ぶだけで、済むなら誰も苦労しない。

スイスは美しい国！だけでなく、手堅い政治や国の在り方とか、裏支えしている厳しい部分も見てこなければならない。

113kmを走行し、まず、マイエンフェルトに寄る。世界的な名著『ハイジ』は、ヨハンナ・シュピリがここを散策中に生まれたとされる。彼女は、息子の療養

に近くの温泉に来歩いて、着想を得、『ハイジ』の原作ではクララが療養で滞在するとなっているらしい。そしてハイジが夢遊病になったとか、クララが歩けるようになつたとかは、かなり大人向けの児童文学のあたりだ。

藤田青年は「逆輸入されてのハイジ像…」と言つてはいたが、それぞれの国の人人がアルプスの風景に重ねた、純粋さとか、無垢とかを投影してのハイジ像があるのだろう。累計発行部数は5000万部以上とされるが、日本の場合1974年放映の宮崎駿の『アルプスの少女ハイジ』が、アニメブームの初期となり、さらに人気を高めたといえる。



《マイエンフェルト ハイジの村》

この手の虚構で作られた観光地は、興味が湧かないが、ともあれ、作り物のハイジとペーターと羊像から、左折して、牧草地の下をしばし歩くと、その村はあつた。架空の、とつつけたハイジの村(ハイジドルフ)に、ハイジの道(ハイジヴェーグ)に、ハイジの家なのである。当時の冬の家を再現し、家具・民具をおさめてあるという家には、100CHFのチケット代を払ってまで入ろうとは思わなかった。ハイジの泉の、覗き込んでいるハイジに至つては、とりあえずそうと確かめたまで。

17時と言うのに、太陽はまだ高く、アニメ徹夜した身には、暑すぎる田舎の村だった。

私にとっては、おまけのマイエンフェルト。でも、山趣味から入り、マッターホルンとモンブランくらいが知識の私が、知らない方のスイスがこちらなのだ。

以下が、その勉強…

「エンガディン地方は、スイス東部にあるグラウビュンデン州の南、イタリアやオーストリアとの国境に

ほど近い地域。その魅力は、優雅なアルペンリゾートとしての歴史を持つサンモリツと、その周辺にちりばめられた宝石のように点在する小さな村、湖のほとり、静寂の森などにあります。『Engadin=イン川の庭』という名の通り、川沿いに開けた明るい谷には、年間を通して眩しい陽射が降り注ぎ、いくつもの清らかにたたずむ湖や、白く輝くベルニナアルプスの美しい山並みが広がります。さらにはスイス最古の言葉「ロマンシュ語」や固有の伝統が残る緩やかな時間の流れは、エンガディンの魅力のエッセンスとなっています」と、説明にある。

そんな地域のうち、上流部をオーバーエンガディンという。今回まず回る地域は、オーバーエンガディンというのが、より正確らしい。イン川は、昨年インスブルック(イン川にかかる橋)で知ったように、よりドロミティー・チロルに近く、神聖ローマ帝国の文化圏に入っていた側になる。

高速道路や飛行機の時代になつてしまふと、馬車が主体だった頃の交通網や距離感覚が判らなくなってしまう。100年前、不便な山岳地域を観光資源とすべく、山岳鉄道の完備を考えた際、サンモリツを起点としたのは、その頃の富裕層が集まる地域だったからだ。それで、ベルニナ特急も、氷河特急もここが起点になっている。

ちなみに、スイス東部最大のリゾートで、国際会議が開催されるダヴオスは、エンガディンの北側にある。いろいろと、腑に落ちたのだった。

「暑い～」とバスに乗りこみ、冷房をきかせて、今宵の宿、サンモリツを目指す。

サンモリツは「シャンパン気候」と呼ばれる、年間322日の晴天日を誇る、穏やかで暮らしやすい地域だ。標高1800mの街の中心部は、5つ星ホテルに、高級ブランドのショップ、グルメ、SPAが集中しているらしい。最古のスキーリゾートであり、世界最古のスキーゲレンデのある街だ。第2回と第5回の冬季五輪が開催され、今も凍ったサンモリツ湖で、雪上競馬大会が行われている。夏は比較的すいていて、最も賑やかなのが、冬。周囲は手頃な傾斜のスキー場らしく、いくつものリフトがかかっている。

到着の遅れた私達は、まず夕食のピザ店に寄る。大

量の野菜サラダに、ピザ・マルゲリータ、名物のエンガディナー・ヌストルテ（クルミをキャラメルで煮て、固めの生地で焼いたもの）。ピザの生地が薄くてよく焼けていたのはいいけれど、やはり1枚完食は無理。水がデカンタでテーブルにおいてあったのがありがたかった。

デザートの間に明日の予定を聞く。明日は、8時発。ハイキングの出で立ちでロープウェーに乗って1回目のハイキング、午後はベルニナ特急(Bernina Express B.E.)に乗るのだ。



《ベルニナ特急 ブルージオのオープン橋》

20時50分着のホテルオイローパ(EUROPA)は、大型バスにはきつい、狭い路地の先だった。花はどこにも、たっぷりと植えられている。増築を繰り返しての231号室は、殺風景な中庭に面し、風光明媚のかけらも見えない。暖房パネルが部屋にもバスルームにもあるが、エアコンはないのだ。今後の猛暑対策をどうしていくだろう？

長かった一日。汗を流し、準備を整え、寝る。

◆6月29日(日) シルヴァプラーナ～コルバッチ
～ムルテル～フォルクラスールレイ往復
～サンモリツ～ティラーノ～サンモリツ

今日は初見三昧。ガイドブックには「2泊すると、公共交通を無料で利用できるバスを貸与される」とある。2泊×3回は、そんな各種バスを利用…の都合もあるのかもしれない。実際スイスにはいろいろなバスがあり、長期滞在が楽しめるようになっている。ツアー任せには無縁の事だが…。

ハム、ヨーグルト、パンが豊富なブッフェ。完熟

アプリコット1個をおやつにゲット。皆の出で立ちも山スタイルに変わった。

チャンプフェール湖とシルヴァプラーナ湖を仕切る橋を通り抜けて、スールレイにあるロープウェイ駅へ。

ここで、ガイドの飯野さんと合流。「この春の異気象で雪解けが早く、このシリーズの第1回からもうハイキングがやれたくらい」と言う（昨年、第1回になったドロミーティでは、ハイキングが全部空振りの目に遭っているから、この説明の意味がよく分かる）。さらには、「実は7月のスイスは結構雨も降るので、今日のような展望のきく快晴は本当に珍しい」と言われる。ついに、晴れ女に復帰か？！

ぐいぐいと上がり、湖水群が広がっていく。なだらかな山々は、まさにスキー場向けだ。

ベルニナアルプスを見る展望台はいくつかあるが、コルバッチが、一番標高が高く、山が険しく見え、湖水の眺めも良いとされる。乗り継いでコルバッチ展望台3033mは、まさに豪華版であった。



《コルバッチ展望台にてピツ・ベルニナ》

大きな山塊の左側がピツ・ベルニナ4048mで、右がピツ・シェルシェン3971m。右にチエルヴァ氷河を挟んで、三角帽子のピツ・ロゼック3938m…が、ベルニナ三山と呼ばれる。さらに右にロゼック氷河をはさんでピツ・コルヴァッチ3451mが続く。左へは、流れ下るモルラッチ氷河を挟んでベラヴィスタ3922m、さらにピツ・パリュ3899m。ベルニナアルプスの東側にあたるこちらは、ベルニナ特急のラゴ・ビアンコでも見えることになる。

そのさらに、左、ケーブルの屋舎ギリギリに、「オーストリア最高峰グロースグロックナー3798mが見えていますね」とのこと。昨年は傍まで行っていながら、吹雪で見ていない。こんな所から、それを

挙るなんて…。

その反対側は、イタリアに続く谷だ。

澄んでいるお蔭でヴァリスアルプスまで見えている。すなわち、モンテローザに、マッターホルンだ。もちろん索道の先には、シルス湖、シルバープラーナ湖、チャンプフェール湖、サンモリツ湖が並んでいて、サンモリツのホテル群も見えた。

イタリアへ買物に行けば、3分の1の値段で買え、一方、イタリアからは2~3倍の俸給のために、毎日スイスへ通勤しているそうだ。専用のビザがあり、そんな暮らし方で御殿が建つとのこと。

氷河にはところどころに、ハイテクマットがかぶせてあり、融解を防いでいる。スイス製のこのマットが、融ける氷河に悩む国々に飛ぶような売れ行きで、温暖化での唯一のメリットといえるそうだ。



《《フォルクラスルーレイへのハイキング》》

乗り継ぎ駅のムルテル 2699m で下車。むき出しの岩場地帯だ。フォルクラスルーレイ（峠）2755m まで、5km 標高差 93m を往復…とあるが、実際には一旦谷間へ下ってから登り返すので、もっと標高差があり、きつめではあった。



《《追い越していくマウンテンバイク》》

暑くて、喘いでいる登り坂で、マウンテンバイクが追い越していった。ここの人達は、ジョギングに

しろ、マウンテンバイクにしろ、実に自然を楽しんでいる。裕福なうえに、狩猟民の血が濃く流れていって、動ける体作りを、より是とし快とするDNAがあるのかもしれない。

飯野さんは、「花は本当に、今が満開です。8月の花がどうなるか、心配なくらいです。」と言った。

実際、一見裸地には、たくさんの花が咲いていた。

岩場に咲く花、雪が残っていた場所に咲く花、草原がかかった所に咲く花…キンポウゲ系の黄色、サクラソウのピンク、リンドウの紫、ひなげし系の白…様々があって、実に楽しかった。特に春に咲くリンドウは、アルプスの空の下ならこそ青色で、日差しに映えての全開状態で、見事だった。



《《ベルナ・リンドウ》》

花撮影に追われて、ビリで、峠に着くと、再び、ベルニナルプスが広がっていた。窪地に池があり、これが「逆さベルニナを撮影できる」の意味だった。そこに建つ小屋からのホースから水が溢れていて、池に注がれ、おたまじやくしが泳いでいた。



《《峠の山上湖とベルニナルプス》》

この小屋の食事もおいしいそうだ。地元民らしきもぼつぼつ歩いてはいた。安い年間パスなどで涼しい所に上がって、高山植物を歩きながら楽しんで、絶景を眺めつつおいしい食事…そんな老後だった

らしいな。

行きが1時間30分、帰りが40分所要。「花がきれいだったけど、暑くて、きつくて、参った」…顔の皆の表情に、「実は、ハイキング3回のうち、今日が一番きついんです。あとはもう楽勝ですよ！」と藤田青年は、妙な励まし方をしていた。

飯野さんは、「ツエルマットのハイキングも、ユングフラウのハイキングもたくさん的人が行くけれど、ベルニナでハイキングするのはトラピックスくらい。でも花はこちらが一番きれい」と言っていた。私も、結果的に、牧草系が多かった2か所に比べ、このコースが一番花の種類が多く、よかったです。



《シルス湖とサンモリッツ方面》

再度サンモリッツの谷を見下ろして下り、ホテルへ。山用小物を部屋に置いてきて、レストランでの昼食は、そんな湖でとれるサーモンのグリルとグリーンサラダ、アプリコットケーキ。13年前は、「スイスは野菜がとれない」と言っていたように思うが、今は説明不要なくらい、普通に、クリーン栽培で供給されているのだろう。

午後は専用バスに乗り込み、イタリアのティラーノへ向かう。B.E.に乗るために、わざわざ同じ区間を先にバスで逆行するのだ。

さて、「レーティッシュ鉄道アルブラ線・ベルニナ線と周辺の景観」は2008年7月に世界文化遺産に登録された。

ベルニナ線は、クール（グラウビュンデン州の州都 約5000年の歴史あるスイス最古の街）とティラーノを結ぶ鉄道だが、このうちの世界遺産区間は、トゥージス～ティラーノ間。ベルニナ全線とする場合は、サンモリッツに寄らないルートになるので、少しややこしい。

今回のように、B.E.としてティラーノからサンモリッツ（ここを「ベルニナ線」という 145km）の2時間20分を楽しみ、別に氷河特急(Glacier Express G.E.)として、サンモリッツ～ツエルマットの8時間に乘ると、残りの世界遺産部分サンモリッツからトージス（ここをアルブラ線という）を走ることができる。有名なランドヴァッサー橋は、トゥージスの手前で、実はどちらの特急も走るのだが、もっぱら G.E.の宣伝の方に使われている。

平均時速35kmで、どちらも、「世界一遅い特急列車」と言われている。あくまで景色を楽しむ観光列車であって、アプト式ラックレールが、急勾配の安全走行を支えている。

この急勾配のために、ブルージオには正円のオーブンループ橋が作られたり、「アルブラサーカス」と呼ばれるループトンネルが、5つも ベルギュンとプレダの間に掘られたりしている。ベルニナ線の全線開通は1910年のこと。たいした機材もない頃に、山岳鉄道に掛けた執念の結果だ。



《ベルニナ特急ティラーノ駅の乗り場》

さらには、もうバスやマイカーでいくらでもその部分を走ってしまえるのに、現在も観光列車としての人気を保ち続けている。展望のきくパノラマカーや、座席まで届ける食事や、ワゴン販売、駅から駅の間のハイキングコースなどで、乗車率をあげている。

私自身は、もっと景色に入り込めるバスの旅の方が好きだ。だから B.E.の横を、レールを見ながら、あるいは時折り走行電車も見下ろしながら走れる

ことには、大満足していた。

サンモリツを出れば、まずはイン川沿いを線路に併行して走り、まもなくベルニナアルプスの麓、グラウビュンデン州最大と言われるモルテラッチ氷河のそばを通る。ミックさんが指さして「ピツ・ベルニ」と言っている。

しばらく白銀が続いたあとには、白い湖ラルゴ・ビアンコが広がり、その上にはパリュ氷河がのっている。電車が絶景で止まっているのが見える。



《ラルゴ・ビアンコとパリュ氷河》

電車はそのあとループトンネルに入って行くが、バスは大きな谷を大迂回をしながら降りていく。名前を教えてもらえないが、河童橋からの穂高か、槍沢からの大屏風かのようのが見えている。アルペンローゼや花々も咲いていて、天国のようなバス遊覧。

平地に下がって、再び線路と並び走る。ミックさんは、オープンルート橋にさしかかる時刻を逆算していたようである。お蔭で、時計回りにおりてくる列車をばっちり撮影できた。「ダンケ！」感謝の拍手。



《路面を走るベルニナ特急》

その列車は車道とも交差し、その後は路面電車のごとく、車道を走る。路面いっぱいゆえ、他の車は

後ろについて走るしかない。

「ITALIA」で国境越えし、レールが増えていくと、まもなく、ティラーノ駅だった。

車外に出ると、猛烈に暑い。さっそく、本場ジエラートをゲットした。「グラツツェ」に「謝、謝」で返された。

15時50分、駅舎前に再集合し、団体ゲートでプラットフォームに出る。4人ボックス座席の左右での不公平があるからと、藤田青年は、ペア単位での座席籠を用意していた。私は、進行方向へは左側の（この場合は当たり）、トイレ傍をゲット。パノラマカーゆえに、上までガラス窓になっているから、帽子をかぶっていないといけない。

さっそく、オープンループにさしかかった。車内からは、窓ガラスの反射があって、けっこう撮りにくい。撮影にこだわる場合は、窓が開くデッキから撮影となるらしい。電車は6両編成くらいで短く、そのことも車内からはそれらしく撮りにくかった。



《ベルニナ特急車内からのオープンループ》

今度は約1000mの標高差を、ジグザグに標高を上げていく。名もないアーチ橋がいくつもあった。

到達したアルプ・ブリュム駅では、パリュ氷河が広がるとして、停車時間が長かった。車道は大きく迂回している箇所であり、電車駅ならこその風景なのだ。「標高2091mの断崖絶壁の上にあり、ピツ・バルナとピツ・パリュの間から流れるパリュ氷河の大迫力の眺めが楽しめる展望ポイント」とある。ただし、もう撮りにくい、逆光の時間帯になっている。藤田青年に外からの、乗車証拠写真を撮ってもらった。

何分間停車しているのかも不明だった（スマホで、

この手の情報はとれるらしかった)が、この時、客の三人組は小道具も使っての撮影に励んでいたようで、車外の前方に走っていって「キャー」、反対に走ってまた「キャー」をやっていた。何をやっているのやら、確かめる気も、尋ねる気もなかったのが、歳の差かも。

B.E.乗車限定のブリキ電車入りチョコと紅茶が配布された。もってきたテルモスのお湯で、紅茶を飲んだ。

最高地点は、次の 2253m のオスピツィオ・ベルニナ駅で、ベルニナ峠(2307m)の真下にある。ただし、停まるのは普通列車のみで、特急は止まらない。ここから、アルプ・ブリュム駅まではハイキング路があって、そんな違いは、満遍なく利用までを考えることかもしれない。ラックレール方式を除く鉄道の駅としては、ヨーロッパ最高所の駅もあるそうだ。



《アルプ・ブリュム駅からの展望》

ガイド本には、さらに「広いラーゴ・ビアンコを手前に、ピッツ・カンブレナの峰々とそこから流れだすいくつもの氷河は圧巻」と書いてはある。もう融けているのと、なだらかな傾斜の谷の部分なのと、逆光がきつくて、先にバスに乗っている時に撮った写真で照合すればいいわ…で、眺め通り過ぎた。

そこから、やや下り気味に、より白銀のモルテラッチ氷河が広がっていく。バスで予習しておいて、電車旅で復習というのが、それなりに面白かった。

18時25分、サンモリツ着。

ホテルまでわずかな距離になるが、ミックさんが待っていた。仕事とはいえ、ミックさんもティラーノまでの一往復をやったのだ。狭い街中なのに、今度は、バック走行でホテルオイロープに寄せたのだ

った。今日でお別れにつき、ループ橋の分も感謝の拍手。

乗っていただけだったが、疲れた。朝食と同じレストランで、紫キャベツのサラダに、ペンネ付きサーモングリル、チョコとアイスをいただく。



《ペンネ付きサーモングリル》

明日は移動日だが、一日 G.E. (291km 8時間)に乗っているだけだから、とりあえず押し込んでおけばいい。それで、「何も増えていないのに…」、トッコさんのトランクは增量用のファスナーを開けることになった。

◆6月30日(月) サンモリツ～ツエルマット
1日3本のG.E.に乗るため、朝食はやや早め。

今朝の運転手は女性ドライバーだった。たった15分の乗車で駅に着き、トランクをまとめて並べる。駅には、何両もの赤い車両が停まっている。

ヤナギランが咲いているのに気づいた。晩夏の花のように思っているが、サンモリツ湖を背景にいれるように撮った。シャンパン気候の空に雲が垂れて山にかぶさり、暗い湖面に、雨の輪ができ始めている。



《サンモリツ湖とヤナギラン》

「昨日のうちのハイキングでよかったですねえ」と言っているうちに、雷鳴がとどろき、バケツをひっくり返したごとき豪雨に。雨具の備えのない人達が、駆け込んでいた。

年間 322 日晴れるという場所で雷雨にあうのも珍しい。こっちは一日乗るだけなんだし…まあ、いいか…ながら、この時ツエルマットでは、ハイキング中止になっていたのだ。

ここでも、座席抽選があった。昨日と同じ、車両の端で、トイレが傍の場所になった。宣伝通り、「すべての座席を買い取ってある」ので、「楽々、一人座りをして下さい」であった。藤田青年を男性群が手伝い、トランクを列車に乗せた。

13 年前もそれなりにモダンな車両と思ったけれど、さらに、綺麗な車両になり、中央テーブルも折り畳みで、幅を広げられるようになっていた。

8 時 39 分発。291 の橋と、91 のトンネルがある 291km、8 時間の電車旅。幸いに雨はあがつていった。(これを打っていて、見間違いか?と思うほど、これらの数字は語呂合わせ状態だ。)

イン川沿いのサンモリッツは標高 1775m。そこから下がって、2 番目のサメーダン駅と、また登り返しての 3 番目のプレーダ駅の間で、5865m の長さのアルブラトンネルを越える。アルプスを越えるトンネルとしては一番の高所 (1815m) である。

そもそも「エンガディン」すら初耳には、馬の耳に念仏に近い情報だが、せっかく現地に行ったので、ここには、もう少し書いておく。

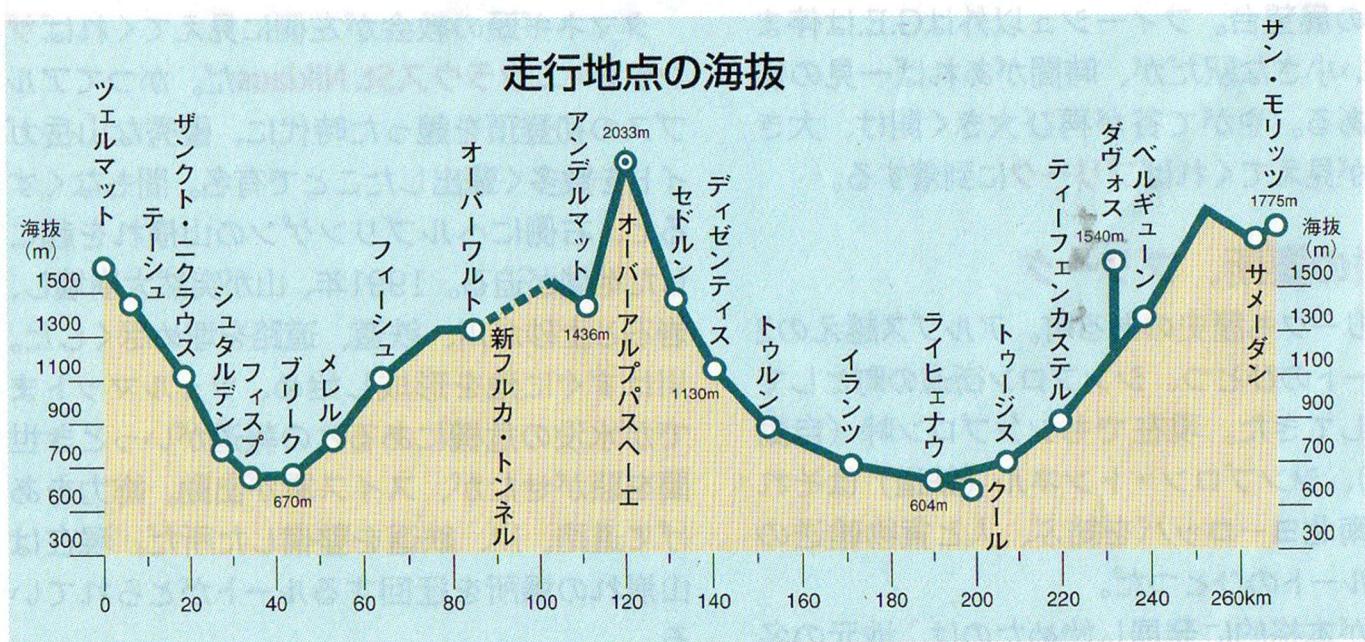
トンネルの上はアルブラ峠 (2312m) で、分水嶺として知られており、峠より南側に降った雨はイン川からドナウ川に流れ黒海へ。北側に降った雨はアルブラ川からライン川へ、そして北海に注ぐ。

そこから、アルブラサーカスと呼ばれる 5 つのループトンネルと 6 つの高架橋があり、400m 下る。ループトンネルは遠心力でそれらしくは判るが、撮りようがない。



『氷河特急車内からのランドバッサー橋』

有名なランドバッサー川にかかるランドバッサー橋はフィリズール (1080m) を出てすぐの、ランドバッサートンネルを出でて左側のカーブだそうである。進行方向左座席側の私達は、



『地球の歩き方 スイス』より

「当たり」の場所だった。9時30分過ぎ、それはあつという間だった。窓ガラスの反射がなんとも邪魔だった。高さ64m、長さ130mの石橋は、外から撮れるものであって、「乗りながら撮る」のは、自己満足までだ。

また、アルブラ川にかかるソリス橋も、渓谷からの高さ89mで、ルート中最高、164mの石橋であり、その先のトゥージスで、世界遺産指定区間が終わる。宣伝はあたかも、ツエルマットまでG.E.全区間が世界遺産のような言い方をしているが、実際は、往年の建造技術を駆使したその区間のことなのだ。

ライヒェナウでライン川に出て、東に州都のクールがあるが、西の上流側に向かう。白い岩肌の渓谷はスイスの「グランドキャニオン」と呼ばれている。



《ライン川のグランドキャニオン》

この辺り、ガイド本には「ライン川の大地溝帯。もともとは氷河時代後期に氷河が後退する時に、アルプスが大規模な地滑りを起こして巨大なダムを作り、それを今度はライン川が削って、現在のような複雑な地形を形成した。この景色は、鉄道路線からしか見られない」とある。グレートネイチャーでも、それらしきことを言っていたが、立体図でもないと理解は無理。

もらった絵地図は楽しいけれど、ふむふむといえるほど、スイスの歴史もヨーロッパ全体の歴史も知らない。実際、街の真ん中を通っているわけでもないし。正直、「この町に○○がある」と書かれていても、「それが何か?」以上にはならない。

カーブが少なくなったこのあたりで、昼食のサラダが運ばれてきた。これをシートサービスあるいはケータリングという。2~3人分をいちいち運ぶ…は、ヒマな話もあるが、それで雇用が維持される。

チキンカレーにザッハトルテ。8時間は長いから、

食事時間もとらないと…。歩かないのは楽だが、乗っているだけも飽きてしまう。



《氷河特急のチキンカレー》

G.E.は途中で、鉄道会社が変わる。ライン川沿いと、ローヌ川沿いでは州も文化も変わるので、サンモリツ～ディセンティスがレー・ティッシュ鉄道(RhB)、ディセンティス～ツエルマットが、マッターホルン・ゴッタルド鉄道(MGB)となるのだ。食事はRhB区間で出ていることになる。

ディセンティスの次にルート最高地点オーバーアルプ2033mがあり、その次が、アルプスの十字路と呼ばれるアンデルマットだ。この地下に、世界最長(57km)のサン・ゴッタルドベース鉄道のトンネルが通っている。このあたりも、実際には見ていないが、大枚使ったのだから、一度は書いておくとしよう。

最高地点にはオーバーアルプ湖があった。昨日のB.E.のラーゴビアンコもそうだったが、最高地点はとんがっているのではなく、平らな湖が出来ているほどなだらかな乗越だ。谷奥には氷河が見えるし、ゴンドラが動いていて、展望台へ向かっているようだった。



《最高地点 オーバーアルプ湖》

線路わきはお花畠になつていて、のんびりと乳牛が電車を見下ろしているのだった。チロルでも思つたけれど、こんな場所で飼われる牛は幸せだ。残飯暮らして、きつい労働をする牛もいれば、自然体で牧草を食べ、良質の乳を出せばすむ牛もいる。生まれた国ガチャのようなことは家畜にだつてある。

そんな山地が、隅々まで手入れされているのには、感心する。一度だけ、麦の刈り取りを見たが、ほぼ人影を見ない。なめるように牧草が刈られて、なだらかな傾斜が広がつて、時々、同じ方向を向いた家が並んでいる。たぶんスキーゲレンデをならす雪上車みたいのが一気に牧草の刈り取りを済ませてしまうのだろう。本来なら木が生えていて不思議ではない山地が、なだらかな牧草地になつてているというのは、伐採し、根も掘り上げて、機械が入れる傾斜にした苦節の年月あつてのことだ。どこをとっても絵葉書になるような…はそんな努力の賜物なのだ。

ローヌ氷河が流れていた場所には長さ 15km の新フルカトンネルが掘られ、G.E. はそれが出来た 1982 年から通年運行となつた。それまでの、1930 年からの運行は夏期のみだった。その旧線を今は夏だけの SL が走つてゐる。苦節の線路も景色も決して無駄にせず観光利用してしまうのがスイスだ。

なお、ユングフラウのアレッチ氷河もこちらへ流れている。ユングフラウ三山の写真も情報も北側ばかり…は、南側がローヌ川の断崖になり、G.E. に接続するような交通網がないからだ。

夕立か？の雨が車窓を濡らした。

他の交通網と接続するのは、ブリークで、次のビスピから、ローヌ川を離れてマッターホルン谷に入る。13 年前私が G.E. に乗つたのは、サンクトニクラウスだった。予約がなかつたのか通過。家屋はやや無骨になり、スレート屋根や、ネズミ返しも見える。

そして 1991 年の土砂崩れの跡なる所を通る。決定的な護岸らしきがなく、まだまだ崩れそうではある。

谷が狭いため、マッターホルンは、ツエルマット直前にしか見えない。私はどんな形で見えるかを知つてゐるから、雲の間にボウッと…を見分けられたが、あれだと思う間もなく駅舎に滑り込んだ。

(今、6 か国語分を 1 冊にしたパンフレットを見ついている。スマホのデジタル・インフォテイメント・

システム 8 言語でリアルタイム情報をとれたり、備え付けのヘッドフォンでオーディオガイド 6 言語を聞けたりしたらしい。周辺にそのことを尋ねる客はいなかつたし、藤田青年は、わざわざ説明もしなかつた。デジタル慣れしていない客と判断したからか？私はそうだったけれど…。)



《歓迎のアルペンホルン》

ツエルマットは電動力のみだから、ホテルが電動ミニバンで、トランクだけを引き取りに来ていた。

あいかわらず賑やかなツエルマット。自力で歩いて回つた街並みだから、よく覚えている。人が囮んでいたのはアルプホルンの演奏だった。園芸種のエーデルワイスも植えこんである。

ウィンパーのレリーフ、マーモットの泉、アルピニスト達の墓、そして、フィスパ川にかかる橋（日本人橋）…ありや、マッターホルンが見えない。見事に見えない。



《マーモットの泉》

宿は、橋を渡つて 5 軒目くらいのアルバナ・レアル。橋には近いから、朝焼けを見に行くのは便利だ。エレベーターがごく狭く、0 階がロビーということ

や、地下への階段があっちにも、こっちにもで、ややこしかった。看板そのものが4種くらいあり、宿だけでなく、いろいろ営業しているようだった。

夕食は、その、ややこしめ地下に下りての、イタリア料理。リコッタチーズとトマトのサラダ、ラザオリ、クリームブリュレ。量的には、日本人向けになっていて、初めて完食できた。

ここで相席となつたのが、歳の差夫婦。やっと山趣味らしき人がいたか？であったが、奥様の話がどんどん、インドにいる息子の髪の話にまで流れていった。

「マッターホルンが見えてますよ」に、外に出ると、中腹に雲が出ていたが、拝めた。明日、午前中は晴れのこと。

◆7月1日（火） ゴルナーグラート～ローテンボーデン～リッフェルベルク～ツエルマット～スネガ～ツエルマット

5時10分、朝焼けを見に、部屋を出る。昔キリマンジャロトレッキングの際、相部屋嬢にカードキーを持って行かれたら、ドアが閉まるなり真っ暗になり、水道栓まで止まらなくなつて、洪水になりかけたことがあった。1枚しかないこともあり、わざわざ「カードキーは置いていくね」と、出た。

夏至から10日過ぎなら…の見込みは、5時35分の日の出だった。工事のクレーンがやや邪魔ながら、4478mの穂先から朱に染まっての、なかなかいい朝焼けだった。



《マッターホルンの朝焼け》

宿に戻つて…あれ？出る時は、回転ドアの左のポチを推したら、横のドアが開いたのだ。それがうんともすんとも…。黒の四角にカードキーをタッチせ

ねばと気づいた。橋には、同行夫婦が来ていたようだったが…誰も戻つてこない。保安完璧を確認するのみ。

6時15分、ようやく灯りがつき、女性従業員が出勤してきた。「客だが、締め出しをくつた」を身振りで説明。同時に散歩に出てきた夫婦がいて、やつと中に入れたのだった。この失敗談に、藤田青年は「『カードキーを持って出て下さい』と言うのを、忘れていました」と言った。やれやれ、まだまだいろんな目に遭いそう。



《センベルビズム・モンタヌム》

藤田青年は、チケットを先行して買わねばならないため、早出。ホテルフロントではなく、ゴルナーグラード鉄道駅（GGB駅）に8時集合だった。

7時からの朝食は、チーズとハムとヨーグルトと…。ポット用のお湯は、フロントのタンクから…であった。これがまた、ぬるかった。6時からこんな大きいののスイッチを入れても間に合わんけど…だった。

今日は午前のハイキングの後はフリー。昼食も夕食もついていない。山上のレストランを利用して、ツエルマットの店に入つても、または駅前のCOOPで調達してもいいのだった。食べられない時用の、カップヌードルや、梅がゆを持ってきている。その昼食と、COOP夕食に落ち着いた。

GGB駅には、ガイドのフミコさんが来ていた。夏だけこちらでガイドをやり、冬は日本に戻つて、日本語学校の講師をしているそうだ。結構駄洒落を言つては「あら、面白くなかったかしら。ウフ、ウフ…」なんて、ペースの人だった。「花は満開。真夏

のベンケイソウまで咲いて、3週間は早いと感じている」とのこと。

GGB はアルプス登山ブームの 1898 年に開通している。鉄道普及率も、乗車率もナンバーワンのイススなのだ。

皆が定刻前に集まつたので、一番電車に乗ってしまう。右にずっとマッターホルンを眺めつつ、33 分の乗車でゴルナーグラート駅。展望台 3131m までも、なんとなくの坂から、きちんとジグザグに、段をつけた坂になったなあと思った。



《展望台からホテルとマッターホルン》

マッターホルンほど秀麗な山はない。故白川義員氏は新聞社の特派員時代に、マッターホルンの朝焼けを撮影に来て、あまりの荘厳さに呆然とし、気付いたらシャッターを切っていなかったという。その感動がプロ写真家へ転身のきっかけになった。秀峰と、山岳写真の巨匠の対峙…相応しい逸話だ。



《モンテローザとゴルナー氷河》

1番電車ゆえに、独占でき、広々の展望台だ。モンテローザ 4634m、リスカム 4532m、カストール、ボリュックスの双子がいて、ブライトホルン 4164m、グレンツ氷河に、ゴルナー氷河。反対側にはヴァイ

スホルン 4506m に、ドーム 4545m…やっぱり世界レベルの絶景だ。



《ドーム 4545m》



《ヴァイスホルン 4506m》

昔のように次の一团が一斉に上がって来て、私達の方は、停まっている電車に乗り込み、下のローデンボーデンへ移動とする。駅の改札が、黄色いソフトな X 字が広がるようになっていて、さらに安全タイプになったか? だった。



《カルカラタスミレ》

ストックを伸ばし、まず体操。フミコさんは僅かな下りも、イヤホンガイドで細かに注意する。中高

年の野外編は、いくら注意しても足りない時代になっているのかもしれない。「ビオラが多い」とは、カルカラタ・スミレで、パンジーの原種の一つ。アルピヌム・ツメクサ（赤クローバー）、アルペストレ・ハンニチバナ（黄色）といった牧草系が多く、そこにビオラや、モンタヌ・バンダイソウ（センベルビフム・モンタヌム 朱桃のベンケイソウ）が混じる。青のリンドウもあるが、咲きっぷりはベルニナの時よりかなり落ちる。



『リッフェルゼーとマッターホルン』

すぐ、リッフェルゼーを見下ろせる位置に来た。穂先がもう写っている。フミコさん「せっかくのいいお天気ですから、逆さモンテローザが見える池の方へご案内しましょう」と、左にそれる。「滑らないように」の注意があつても、「(花を踏まないように)道を外すな」の注意がないことに不審そうな客に、フミコさんは「同じ所ばかり踏まなければいいんです」と答えていた。家畜が放牧されているような国は、このあたりが違う。

逆さモンテローザなら…の予想通りの場所だった。ただし、明らかに逆光にはなり、人の顔は黒くなってしまうのだった。

大回りした分、ゆるやかにリッフェルゼーに近づく。朝一番は風もなく、映っていてあたりまえのように、かわるがわる、決め写真を撮る。若い三人組はジャンプで撮り、藤田青年もジャンプして、「股下にマッターホルン」を、決めていた（こんな若さは真似できない）。

もっと撮りやすいのが、下のウンターリッフェルゼー。池の傍に近寄りやすいからだ。この時、周りがけっこうじゅくじゅくだったのは、やはり、前日かなり降って、池が増水していたということだった。



『ウンターリッフェルゼーとマッターホルン』

逆さマッターホルンの年賀状を、何枚貰ったことか…もうほとんどの先輩が山引退をしている。

岩の多い、なだらかな斜面はよくマーモットがいるという。「ピュイー」と聞こえるのがそれだ。見張役がいるものだ。やはり上の方にいた。フミコさんは「立ち上がっているところは初めて見ました」と言った。道の横にも「マーモットの巣穴です」があった。

右手台地の上にあがっていくと、再び、ヴァイスホルンやドームが見えるようになった。やや腰高になったマッターホルンに、雲がわき出している。気温が高いのだ。ここでまた、マッターホルンとのツーショットを撮る。アルピナオキナグサの穂がやたらとあるが、この花の盛りは相当に早い…。そんな頃には日本発ハイキングはまだ出ておらず、一面のクロッカスと同様、見ることはないだろう。



『プシラ・キジムシロとマッターホルン』

リッフェルベルク駅から乗車。こここのレストラン利用へと、ここで離れた夫婦もいたが、他は別コースを狙うべく、下山とする。

GGB 駅で、結局、グレッシャー・パラダイス 3883m に行く人が 7 人ほどいて、フミコさんは、ロープウェイ乗り場までのシャトルバスや、ロープウェイに乗ってから…を説明している。私達はスネガへ行くとして、藤田青年が、チケット売り場まではついていってくれることになった。



《GGB 駅で自由行動へ》

この時初めて、昨日は悪天で、ここハイキングが中止になっていたこと、G.E.が私たちの次から落石で運休になりバスが代行輸送したこと、また、昨年 6 月 22 日から 3 日間、ツエルマットが洪水になり、数々のトラブルがおきたことを聞いた（帰国後検索してみたら、フィスパ川が溢れ、周りのホテルが泥水に浸っている映像があった。GGB は 8 月中旬まで運休していた。G.E.も山崩れで代替運行をしていた。）

フミコさんは、ツエルマットから出られなくなり、そういう土地柄ゆえ住人たちが掛けているヘリコプター保険（緊急時のヘリ費用を補填する保険）を初めて使ったという。

昨年の無念が消えなかつた私は、アルプスでそんなことがおきていた年だったのだ…に驚いた。図らずも、アルプスが不遇だった年、その片鱗を味わっていたのだった。

保険の話ついでに、フミコさんは、住人たちが村外者には不動産を売らず、そんな時は元々の住人達にのみ分配を守っていること。最初から電動力だけを使いガソリン車を入れずにいること（ツエルマットの手前のテーシュに大駐車場があり、ガソリ

ンカーの人達は、そこからツエルマットまでは電車に乗る。そのためのシャトルトレーンが運行している）を話した。凄い！そして賢い！

土地を蚕食され続けている不気味な北海道のニセコに比べたら、住人も行政も、信念を貫き通している。また、それがやれるという手本でもある。

彼女は、問われるままに、バラ撒き土産には、エーデルワイス入り紅茶をお勧め、スイスワインもおいしく輸出分がないので、お勧め、チョコ系統は溶けるからよくない…とのことだった。

日本との 2 拠点生活…社長に理解があると言うが…。羨ましいというか、それは裏返せば、ガイド業だけでは食べていけないという意味かも。でも、日本で働くためにまず日本の大学に入りたい、その前段階の日本語学校という需要があり、そんな息子のような年齢の生徒たちとの交流は楽しいという。

女性なら、そんな綱渡りでもいい。ちなみに、学校カリキュラムとして、一年のニュージーランド留学に出ている孫娘は、どうやっていくだろう？まだ当分、英語堪能は優位になるかもしれない。まずは、どこへでも臆せず出て行けるだろう…。

まず、昼食を確保のため、日本語が通じるといよいしいパン屋に向かう。スネガ・パラダイスへの乗り場も同じ方向にあるというので線路伝いに歩く。晴天は嬉しいが、暑い！ドライフルーツをたっぷり練り込んだパンを一つ買った。

フィスパ川に架かる橋のたもとに、シャトルバス乗り場がある。そこで 7 人と別れて、さらに、「でも、どのバスかの指示もいるかも？」と藤田青年が引き返したら、丁度バスが来て、7人は「お先に～」と乗って行った。

トッコさんと私は、目立たないスネガの乗り場に向かう。それらはほぼ地下に施設があつて、地上部はわずかしかない。しかもペラペラ紙で二次元コードが印刷されたハーフパスなるものを見せれば、運賃は半額になるのだ。

ともあれ、藤田青年がいれば、全てお任せだ。「往復」利用として買ってもらい、見送られた。

ひんやりした長いトンネルを抜け、急階段を登つて、同じ急傾斜の車体に乗り込む。完全にトンネルの中だけを 5 分で、明るくなった先がスネガ・パラ

ダイス 2288m だった。

ここから、左右バランスのとれたマッターホルンが見えるという。でももう、穂先半分が雲の中だ。つまりは、グレッシャー・パラダイスへ上がっても、やはり雲の中というまでだ。



《スネガでのアルペンホルン》

マッターホルンが写り込むという人工池ライゼーは下に見える。暑いのと、マウンテンバイクが行き来する砂利道にうんざりして、手近なベンチに座り昼食…とした。展望レストランで、ビールと山盛りのランチなんて…おいしそうにも見えないし、高そうだし。みみっちい金沢人は、カップのビニルをはがし、ぬるい湯を注ぐのだった。

日焼けしたマウンテンバイクマンに、あれれ、ベビーカーを押していくファミリーに、大型乳母車を押し、園児を歩かせている保育士らしき一行までいる。国を挙げて、幼いうちから自然に親しませる、たくましいスイスにはかなわない。

そう眺めていたら、「ザーッ」と滑った音。振り返ったら、長身女性が顔面制動で派手に転倒していた。この暑さで、ふらっと気を抜いたら、そうなるわ。

この先にロープウェイが延びていて、オーバーロートホルン 3413m を間近に出来る。ただ、もう穂先に雲がかかっているのと、情報過多状態だ。ハイキングコースであれ、マウンテンバイクトレイルであれ、これ以上の満喫は無理、拷問。

レストランでアイスバーだけ買った。ここでもアルペンホルンをやっていた。この人達は、有償ボランティアのあたりなのかな…。

ケーブルで下に下りると、さらに暑かった。ねずみ返しの家が残る路地を通り、水場を見つける。空

いたペットボトルに汲んで、味わった。メインストリートに出て、鉄道駅前の COOP に入る。



《鼠返しの家が残る路地》

たいそうな品揃え。ワインは、味の区別がつかない舌だから買わない。ツエルマットビールは、名前にひかれて買う。お茶売り場…「エーデルワイス入り」のコーナーか？皆無になっている棚があった。定番とんがりチョコと、玩具レベルの折り畳みナイフ、夕食用にジュース、サンドイッチ、フルーツを買った。

レジで渋滞している。不足分を後出ししてのお釣りに関して、客とレジ双方の解釈が合わないらしい。同行グループ内の若手が、翻訳機能を使って加勢し通過した。

こっちも、スイス Franc 小銭にはストレスを溜めている。枕銭もあるからだ。中国で「枕銭出すのは、日本人くらいらしい」の意見を聞いたが、そして別に、ペナルティーがあるわけでもないが…どうすればいいの？

COOP を出たなりの同じ建物内に、モンベルツエルマット店がある。如才なく、「ツエルマット店限定品」を並べている。こんな所は、日本人も（日本人相手に？）頑張っている。

マッターホルン博物館に寄る。外観は小さいが、こちらも施設は地下にある。初登頂の栄光と同時に、遭難の悲劇がおきた。それがよりドラマチックにしているわけだ。初登頂を競っての熾烈な出し抜き合いがあり、また、初登頂が済めば、今度はバリエーションルート合戦が始まる。

そんなことは人類の発展につながったり、多くの人が食べて行けるようになつたりへの努力ではない。自分が英雄になりたい、注目されたい…なのだ。

そう思う方だから、「切れたザイルの実物」にも、どこかシラっとなる。

陰気臭い地下は、当時のツエルマット村民の暮らしの再現だ。それは、白峰村資料館や、はたまたネパールの民具展示に似ていたりする。人力のみで、身の回りの資材を利用して生き繋ぐ山暮らしは、どこも、佇まいや道具が似てくる。ないない尽くしの中での同じ根っこを持ちながら、それでも、国によって別の暮らしや別の言葉や文化をもつようになるのが、おもしろい。



《リッフェルベルク駅と看板》

さらには、今ではどれだけ僻地を逆手にとって観光地に育てていくか？で、もっと違いが出てくる。

GGB の施設にも、ここにも、ザイルを掛けた二人の男のポスターがあるのは、初登頂物語にからめた演劇が、リッフェルベルクであるためらしい。集客イベントを忘れず、関連付けも忘れないツエルマットなのだ。

自由行動で、のんびりできたのがよかったです。

明日は、移動日。またまた集合は、直接 MGB 駅なのであった。

◆7月2日（水）ツエルマット～テーシュ～
シャモニー～ラウターブルンネン～ヴェンゲン
ロビーにトランクを並べてから、朝食をとる。「グレッシャーパラダイスはやはり雲の中だった」と言う。私達も「半分雲の中でした」と返す。

中腹まで陽をあびたマッターホルンに「さよなら」だ。これで見納めの教会に、墓地に。墓の反対側の碑は？日本のあちこちの市との、姉妹都市の記念碑だった。ちなみに妙高市がある。一夫一妻じゃないし、ツエルマットなら、もてまくりになる。

最後のメインストリートで、マッターホルンチョコを買った。分かり易いし、物価高の中ではかえって割安だ（検証：溶けていなかった）。

MGB 駅に、トランクが運ばれてきた。二人くらいの客の場合は、人も一緒に荷台に小さく収まって、運ばれてきていた。

1駅分だけ移動したテーシュから、後半用のバスに乗り込む。コバさんの運転。マッターベルクを抜けて、ローヌ川沿いを下る。

ちょっと懐かしい、シオンの古城を見送る。



《シオンの古城》

セントバーナード犬の像のある道の駅でトイレ休憩をする。救助犬として有名だった犬種の故郷であり、その首には気付け用ブランデーが入っていた。バリーという犬は40人を救助し、剥製になっているという。絶滅しかけて、交配で系統を残したそうだ。



《セントバーナード犬の故郷》

もう一つ。それは、フランス語では、サン・ベルナールとなり、あのナポレオンが馬にまたがった絵「サン・ベルナール峠を越えるボナパルト」の地になるのだ。アルプス越えの要所であり、ハンニバル

がかつて象で越えたとも…。今はトンネルで通過している。長い歴史と地勢をかすめている。

さらにシャモニーへ。トイレ休憩を挟んでも、たった3時間の移動。13年前は、この間のために8日間を掛けて…。

おかしいなあ…スイスへ行ってきたけれど、スイスツアービューは、見ていない景色（ほぼ、ユングフラウ方面）ばかり…。どうしたことなんだろう？私は日本の有名な山なら、ほぼ、山名と、どちら方面から撮った写真かもわかる。それなのに、見当もつかないなんて、どうしたこと？あたりまえだ。バスで3時間相当の距離しか動いていなかったんだから。

たちまち針峰群と氷河が覆いかぶさるように見えてきた。樹間に、アルジヤンティエール氷河、ドリュ針峰、次にメール・ドゥ・グラス氷河…そうと判ったのは、13年前に対岸から、じっくりと見た経験からだった。針峰群のその右端に真っ白にズングリと…いやいやあれは西隣のこぶで、まだ隠れているのが…やったあ、モンブラン 4808m だ。



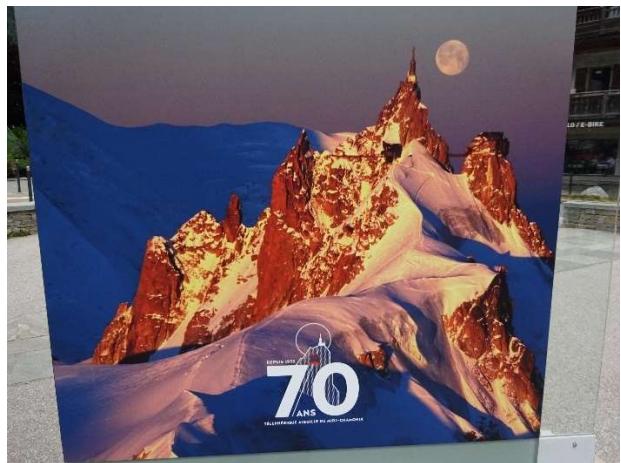
《モンブラン 4808m》

11時30分、シャモニー着。まず昼食だ。フランス領に入って、フランス料理のうちになるか？ポークステーキにマカロニグラタン。チョコスフレのクリーム添え。肩も胸もあらわな女性が給仕。日焼けが気にならないか？それにしばしばタトゥーがあるのも…。持ってきたユーロ小銭で、レモネード代 €4.5 を払った。

レストランを出ると、まだ、ズングリ山頂は見えていた…でも逆光だし、雲が湧き始めている。

そこから街外れとなるエギュ・デュ・ミディ（「正

午の時計の針」の意味）へのロープウェイ乗り場 1035m へ。やたらと「70」のポスターがある。それは 1955 年に完成してから、70 周年の意味だ。



《70周年を迎えるエギュ・デュ・ミディ》

索道の先は雲の中だった。まず、10 分で乗り継ぎ点のプラン・ドゥ・レギュ 2300m。レストランに、カラフルなパラソルが並んでいる。そこからの雪原には昔どおりに、登山者の列が見える。

さらに 10 分で、北峰駅 3777m へ。下りロープウェイ用の整理券を渡される。北峰からの渡り橋で、「14時55分に、下り側の売店前集合」と聞き解散。

富士山より高いとなるから、「走らず、大声を出さず…」の注意もある。

まず、重のしたたる天井の下、中央峰 3842m の頂上テラス（グレッシャーパラダイスが出来るまでは、世界一高い展望台）へのエレベーターに乗る。

予想通り、モンブラン頂上は雪原の先がガスで見えない。見えないから、以前にはなかった設備「空中の一歩（ガラスで囲まれた部屋）」の列にはつかない。3842m のパネル前で証拠写真は撮った。

モンブランを見るための展望台で、モンブランが見えないとなると、そこは持て余す場所でしかない。



《モンブランの見えない頂上テラス》

「氷のトンネル」がなく、ハート型に窓をくりぬいたポスターを証拠に撮影。「CHAMONIX」の看板を探して、各自進め…であったけれど、要領をえないし、面倒くささが先立ったのは、あるいは軽い高山病症状だったのかもしれない。



『氷のトンネルからのモンブラン ポスターより』

下り口の売店前ではけっこう待たされた。大柄の係員が整理券を数えて、一台に乗れる人数ごとに区切っていたからだ。だから、下では、トイレ休憩をしつつ、次の便になった人達を待つことになった。

そこからかなり離れたバス専用駐車場まで歩き、乗車。これが 16 時。葡萄畑の中を、来た時の反対にかなり戻って走り、マルティニからの高速に乗る。

見えなかつたのが主因とはいえ、印象薄いモンブラン。いや、こんな「ちょっとだけよ」では、たとえ見えても「見た！」まで止まりだろう。

来る途中に細かに景色をなぞれたのは、13 年前、狭いシャモニーの谷を挟んだ向かい側の、プレヴァン展望台に上がり、ラック・プラン小屋に泊まるという、一日半のトレッキングをやったからだ。それだけの濃厚接触時間があつてこそ、記憶は残る。タイパ、コスパの短期決戦で、記憶出来たり、理解できたりになるはずがない。

かけがえのない場所を歩き、思い出を刻み、少しは「私のモンブラン」になっていたんだなあ…13 年前には、比べようのない、かけがえのない旅をやっていたんだなあ…。

たった 3 時間分しか見ていない！の不満が消えていた。

モントルーで、レマン湖をかすめ、グリュイエール湖を見下ろす店で休憩をとった。1CHF を払って検札を通ると、50 サンチーム引きの券が出てくる…という有料トイレだったから、主旨に合わせ、チョコドリンクを買う。

物好きにもデジカメで道路標識も撮っていたか



『地球の歩き方 スイス』より

ら、フライブルク、ベルン…と、たどった行程が判る。ここも湖が多く、ちょうど夕暮れの虹がかかっていた。つまりは少々雨模様になった。ベルンとは熊の意味だ。あれ？ フミコさん、「スイスに熊はいません」って、言ったよね。なんで？

バスに乗っている間に…と、藤田青年の説明が始まる。「郷土料理と言うものはありませんが、チーズが豊富。チーズフォンデュは今晚召し上がっていただきます。ユングフラウ3山のアイガーは『人食い鬼』、メンヒは『修道士』からきています。ユングフラウは『乙女』ですね。アレッチ氷河は乙女の長い髪となります。ヨッホは山の間の平らな所をさします(乗越だね)。楨有恒がミッテルギ稜で初登頂をして、その後、寄付で山小屋を建てています。ちなみに、アイガー、グランドジョラス、マッターホルンが、三大北壁です。今井通子さんが、女性の初登頂をしています。

ヴェンゲンも、ガソリン車規制をしている村です。長期滞在をする人が多いリゾートです。」

ここでも勉強。

首都ベルンの南に広がる高地を、「ベルナーオーバーラント」と総称する。ツエルマットなどは元々生活に厳しい寒村であった。そんなアルピニズムが入って来る時代の前の、スイスらしい風景や暮らしが広がっていたのが、こちら。南斜面の明るい日差しを浴びている地帯だった。

そこには、アイガー3970m、メンヒ4107m、ユングフラウ4158mのユングフラウ三山が並び、続く、ヴェッターホルン3692m、シュレックホルン4078mも、厳しくも美しい岩壁を見せている。

その前のなだらかで広々した牧草地は、長い汗の結晶であり、冬はスキー場にもなれば、避暑地として富裕層を迎えることになった。大衆が観光対象でなかった頃、ここに人や荷物を運ぶための登山鉄道があれば…をと考えたのは、富裕層であつたらしい。

クライネ・シャイデックまでは1890年に、ユングフラウヨッホまでは1912年に開通している。

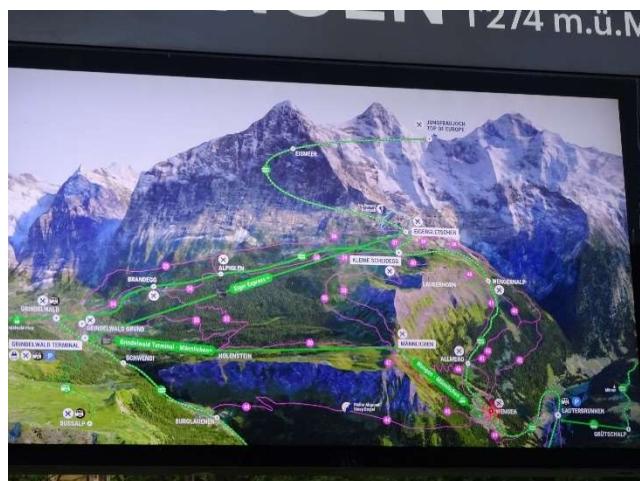
急勾配のため、機関車は、登りでは下から押し上げ、下りでは下でブレーキを掛けねばならず、列車の最下部に付く。つまり、線路はつながっているけれど、機関車の付け替えはできないから、グリンデ

ルワルト側も、ラウダーブランネン側も、それぞれが往復での運行。全てが、クライネ・シャイデックで乗り換えになる。



《望遠でのユングフラウヨッホ》

かつ、アイガーをぶちぬくトンネルは、発想も並みではないが、それゆえ通年利用が可能にもなった。各ポイントをさらに、いくつものゴンドラがカバーして、自在に、スキーやハイキングコースがとれるようになっている。2020年には、アイガーエクスプレスが完成し、既存ルートをさらに短縮した。



《現地の絵地図》

ちなみに、2001年、「スイスアルプス ユングフラウ、アレッチ、ビーチホルン地域」が世界自然遺産に登録されている。ヨーロッパ最長のアレッチ氷河を中心に、周辺部に広がる貴重な自然環境だ。

なぜこっちの山が該当し、あっちの山が該当しないのか？おそらく、「世界自然遺産に登録」は、宣伝になる一方で、ややこしい書類や報告などが多く、負担金も生じるものと思われる。「白山ジオパーク」の紹介で知ったが、それは外部の勝手な思惑や勧告が入ることになる。申請したうえで登録となるから、まずは世界遺産にしたいという価値観を当事者

が持つか、そう合意できるか?がある。ツエルマットは独自路線を貫いているが、ともあれ、ユングフラウは(対抗してか?)「世界遺産」を前面に出している。

まだ、カタカナが踊るだけで頭に入りもしない私。随分と谷底に入ってしまったではないか?の、ラウターブルンネンに着く。前方に見える滝は、わざわざ「15分のお散歩」と書いてあった、シュタウプバッハの滝ではないか!どうして、こんな谷底にたくさん人が行き来しとるんや?…の困惑。

見上げる山(ユングフラウ)にかかる雲が切れだしている。トランクを下ろし、地下道を通って、プラットフォームに押し上げた。明るいが、もう20時だ。州旗が2枚と、国旗の3枚がぶら下がる。



《ラウターブルンネンの深いU字谷》

滝の掛かる側は300mの絶壁だが、反対側はまだなだらかで、登山鉄道が延びて、500mを這いあがっているのだ。それは、クライネ・シャイデックまで伸びている路線だ。

もおお、何で、バスでそのまま行かんのや?と思いつつ、トランクを登山電車に乗せ、出発。上がるほどに、U字谷の深さが判る。2番目がヴェンゲン駅 1275mなのだった。山奥とも思えない、小綺麗な駅前。

ホテルの電動カートがトランクを引き取りに来た。こっちも乗せてほしい気分ながら、藤田青年の後を追って、上り坂をあがる。左にくね、さらに右にくね…の上に、由緒ありげな「レギーナ」があった。ピアノの演奏が聞こえた。

前庭の先の山(ユングフラウ)が、いよいよ残照

モードになってきた。動くの、もう御免…と言いたいが、夕食は、他のレストランだという。



《残照のユングフラウとヴェンゲン》

玄関前の坂を下り、線路沿いの本道に出て、さらに上がった先のホテルへ。

そこで、お待ちかね?の前菜、チーズフォンデュ。かなりワインの香りがきつい。パンの他に、マッシュルーム、ポテト、ブロッコリーの皿も出てくる。疲れ切ったうえ、こんな21時過ぎに、食欲がわからない。フォンデュ鍋を空にして、さっと卵とご飯をいれてリゾットで仕上げ…なんて騒げたのは13年前。次のポークとナポリタンの皿も、控えた。胃も相応に加齢している。

22時25分、「最後の下りと登りはもう無理」「近道らしき横道があったよ」と、ブツブツ後ろ向き会話をやっていたが、実際、最短の横道があったのだ。行きもこの道でよかったのに…。

エレベーターは、内側にはドアのない、まさに忍者屋敷のような、「ドアノブを開けたら、いきなりエレベーター内部」の仕様であった。

部屋がやや狭くなった分、バスがなく、シャワーだけ仕様。シャワーを浴びたうえで、明日の朝食は7時30分から、ハイキング扮装で8時10分集合とのこと。ハイキングとはいえ、スケジュール的にはきつい遊びだ。

◆7月3日(木) ヴェンゲン～メンリッヘン～クライネシャイデック～グリンデルワルト～ラウターブルンネン～ヴェンゲン

朝食は、ホテルレストランで。赤いカードが置いてある予約席だという。天井高く、人も多く、朝からホールパイが何種も出ている。ジャムは大きな棚

に瓶詰がいっぱい、そこから小皿にとり分けてくる。



《種類の多いジャム》

今日は、下りハイキングとスフィンクス展望台へだ。「地球の歩き方」の俯瞰図を見ているが、下りと書いてあるけど、山に近づくからには登りでは？と、やはり体験しないと判らない…。

宿から水平移動でロープウェイ乗り場に向かう。ヴェンゲンは崖っぷちの村かと思ったら、こちらの方が広く開けていて、テニスコートやモダンな建物が多かった。

乗り場に待っていたのはいかにも山岳ガイドらしいGさん。シルトホルンなどハイキングコースが多い、ミューレンが自宅だという。電車、ロープウェイ、電車を乗り継いでいるという。

8時半の始発に乗るべく出発してきたが、ここゴンドラは二階建てで、プラス5CHFで10名までがベランダに上がるという。もちろん手を上げ、じやんけんで勝って、二階へ上がった。



《ベランダ付きロープウェイ》

こちらも急峻な崖で、まさにロープウェイ架設向きで、雪止めがいくつも設置されているのも確認し

た。

向かいの絶壁の上に集落があるのが見えた。それが、ミューレン。まさに、ラウターブルンネンからロープウェイを上がり、さらに鉄道に乗り換えて入れる、ガイドさんの住む村（ATS社が、力をいれている地区）。鉄道普及率NO.1とは、崖部分にはロープウェイを掛け、あとはラックレールを敷設して繋いでいる結果なのだ。ネパールでも、張家界でも、スイスが観光ロープウェイを架けている。経験値が半端ではなく、かつ、その技術力を輸出しているのだ。

上がった先は、台地の端、メンリッヘン。いきなり、三山の残りのアイガーとメンヒがとびこんできたが、山頂は雲の中だ。ユングフラウを隠し気味の目障りなチュッケンが手前に聳えていて、ハイキング路は左に回り込んでいる。



《メンリッヘンからハイキングスタート》

Gさんは黄色の標識の説明をした。どの分岐にも、これが立っているから、一人でも散策できるという。ツリガネニンジンに似た花をまず撮影。



《一人でも散策できる完璧な標識》

周辺はブランコや回転ジャングルジムなどの遊具が豊富。スイスは子供時代から、山が好きになってくれるよう、山頂駅には遊具を備えるのが施策だ。小さいうちから自然に親しみ、国を愛し、丈夫な体の子供になるように…健全な施策だ。

ラウターブルンネンの深い谷と、そこへつながるインターラーケンを見下ろす方ばかりに気をとられたが、反対側へはグリンデルワルトからのロープウェイも上がってきている。立体として地形が把握できること、どのピークにもリフトが繋がっているのが判る。これを前提としてのハイキングであり、それ以前に、ますスキーゲレンデなのだ。

足首などを回してから、ハイキング開始。アルプ（牧草地）は花だらけだ。つい先走って、クイズに答えるように花の名前を言ってしまう。もっと細かい分類は後の話で、まずは見つけては写真を撮った。

アイガーは、北壁が真正面にバーンとあって、ずっと逆光になる。だから、余計、映画にもなった窓がどのあたりか判らない。その麓に直線で見えてくるのは、グリンデルワルトからの登山鉄道だ。その先に、目的地のクライネ・シャイデックがある。全然ピンとこなかった地名が、今、どんどんわかり出している。



《ホーネックからアイガー北壁》

行程の半分の所が、ホーネックであり、チュッケンの尾根が外れて、ユングフラウ、スフィンクス展望台も見えるようになった。グリンデルワルトや、そこに迫るヴェッターホルンがゆったりと見下ろせる。スイスの村風景として典型的なものだ。手入れの行き届いたアルプが広がり、それを守ってくれ

るような白銀の山々、その麓を行く、登山鉄道…人と自然が調和し、ふわっと幸せが漂ってくるような景色。

花々は、雑草並みのシラタマソウが豊富で草原系が多い。岩場はアルペンローゼがミヤマカリシマのように、斜面をピンクにしている。チュッケンの尾根に続くここが、ワールドカップのスキーワーク場になる…も聞いた。スキーリフトが上がってき、さらに頭上にリフト台らしきが見える。その先は、クライネ・シャイデックに下っている。

緑の箱は「なあに？」だったが、愛犬の糞専用のごみ箱だった。愛犬もハイキングのお供であり、その替り、徹底して始末もする。

アイガーがもっと迫るのがクライネ・シャイデックだが、周囲はかえって見えなくなり、ホテルや駅舎が近づく。降雪機の水源になるのか？の池があり、アイガー北壁の登攀コースの看板がある。駅舎の直前、右手高台に新田次郎の記念碑があった



《新田次郎の記念碑》

新田次郎の作品に『アルプスの谷 アルプスの村』がある。昔、山から足を洗う決意をした隣人（仮住まいをした時期のお向かいさん）から、私が山ガイド本を書いていると知ったうえでの、大量の山書籍（ちなみに「日本百名山」の初版本も）を譲り受けたことがあった。そのうちの一冊。新田次郎の、日本の山が舞台の数々の文庫本の中では、異色の紀行だった。

『アイガー北壁 気象遭難』『栄光の岩壁』というアルプスを舞台にした本もあり、彼は度々この地を取材に訪れていたらしい。

彼の墓は先祖とともに諏訪にある。分骨埋葬は断られたらしいが、妻・藤原ていは、メガネ・万年筆・

取材ノートなどの遺品を、アイガーの見えるクライネシャイデックに自ら埋めた。諏訪で日本の土にはなるが、アルプスにも、夫の痕跡を何とか残しておきたかったのだろう。

10時50分着のここは、登山鉄道の要衝であるが、ホテルは昔からの由緒正しいのが整然と建っている。ユングフラウの下部の氷河からは、たくさんの滝が流れ出しているのが見えた。温暖化…この景色がいつまでも…とはいえない。



『山小屋料理の定番 アルペンマカロニ』

駅舎の中のレストランで昼食。スープに続いて、アルペンマカロニ。マカロニにカリカリに焼いたベーコンを乗せ、アップルソースを添えたもの…山小屋料理の定番とある。しつこい蟻がいて、気になった。トイレ棟が別棟であり、それがとりわけ頑丈な作りで、なるほど、ただの駅舎ではない、標高 2016m にある、兼、スキー場のロッジなのだった。

少々雨がぱらついてきた。標高が高い分寒いと言われていたので、ゴアテックスの方を着る。



『クライネシャイデック ここもロケ地』

ユングフラウヨッホ行きがここから出るため、レ

ールが増えている。山の写真を撮ろうとしたら、電線が邪魔で、それを避けようと前進したら、何本ものラックレールを跨ぐことになった。ここ自体、かなり広い乗越なのだ。

12時20分再集合し、12時30分乗車。2061m から 3454m へ。ユングフラウ鉄道は 1896 年に着工し、1600 万 CHF を掛け、1912 年に開通した。ヨーロッパ最高地点の鉄道駅は、「ユングフラウヨッホ」の名だが、「トップ・オブ・ヨーロッパ」が付記される。スイス最高峰の郵便局、ヨーロッパ最高峰のチョコレートショップ、世界最高峰のウォッチストア…と続く。ヨーロッパ最大のアレッチ氷河 22km を見下ろし、その電力は会社の水力発電所で貯められている。年間平均気温マイナス 7.9 度の地で、365 日の営業をしているのだ。



『北壁途中の窓からの氷河』

途中駅アイスマート 3158m で、写真ストップがあり、氷河のなだれ落ちる部分を見ることができる。

北壁登頂は、1936 年の悲劇として語られ、映画にもなっている。私の場合は、ここの北壁に限らず、英雄視する視点を全くもたない。真っ当に生き、家族や社会を支える選択も、勇気と決断と思うからだ。しかし、怖い物見たさのような話題作りになる点、ある意味、観光資源のうちになる点に、なるほど…をやることになる。

13時11分、ユングフラウヨッホ駅に着く。灰色のトンネルの中だ。そこから、ユングフラウヨッホ駅舎へ。日本語版の「ユングフラウ鉄道 乗車記念パスポート」を受け取る。駅舎内の地図、歴史、割引クーポンと至れり尽くせり。ここの赤いポスト（富士山 5 合目の簡易郵便局と姉妹提携したもの）で 14 時 30 分に再集合とし、解散。

まず黄色のエレベータに乗りスフィンクス展望台3573mへ行くこと。後は半時計回りらしいこと。買物にも励めばいいらしいこと（特に、リンツチョコが安いこと）。来訪記念に、最高地点から手紙を出す…がやれること。

まあ、しかし、人だらけだ。何より、韓国の人気テレビドラマ「愛の不時着」のロケ地になった…が、直近では話題らしい。この手のは…アニメや映画やのロケ地に「キャー」は、私が最も嫌う所。「それがどうした！」以上の価値観をもてない。今ではそんなタイアップをして、SNSに取り上げてもらえば、観光客増になる。配布物にまで…かえって、白けてしまった。



『スフィンクス展望台からのメンヒ』

屋外バルコニーに出ると、迫るのはメンヒ。回っていくと、アレッチ氷河が、さらに回って反対側にユングフラウ。手前の雪原プラトーに、たくさん人がいる。その他は、フランスの何とか、ドイツの何とか…と書いてあっても、そもそもそこを知らないのだった。

そこから下りて、アルパインセンセーション…エーデルワイスの電飾に、巨大なスノーボールと展示が続く。次がアイスパレスだが、トッコさんは「やめておく」という。別れて、私は手すりに繫がりつつ前進。ここのアイスパレスは氷河でずれるため、毎年掘り直し、手すりを付け直している…と聞いた。時々ある洞窟の中には氷の彫刻が置かれている。その先が雪原プラトーなのだった。

まぶしい万年雪の上。真ん中にスイス国旗が立ててあり、展望台をバックに、記念写真の列になっている。その反対がユングフラウだ。それ以上は…眺めておしまい。氷河のスノーパークで、夏に雪遊

びができる…が売りだ。



『アレッジ氷河』

まずはトイレを済ませて…と列につく。これがいっこうに進まない。使えるのが一基しかない。どうして？の開かない片方は、高山病になった人が占拠していたのだ。やっと出てきたら、次には洗面所で吐いて、ここも使えないことになった。高山病への配慮が必要かもしれない。

これだけで集合時刻ギリギリになってしまい、「TOUR」の表示にしたがって進んだが、これまた、階段でぎっしり状態になっていた。ツアー仲間が見えたからまだしも、そして、藤田青年にも会えたからよかったです。動けない今まで、集合時刻も過ぎてしまった。



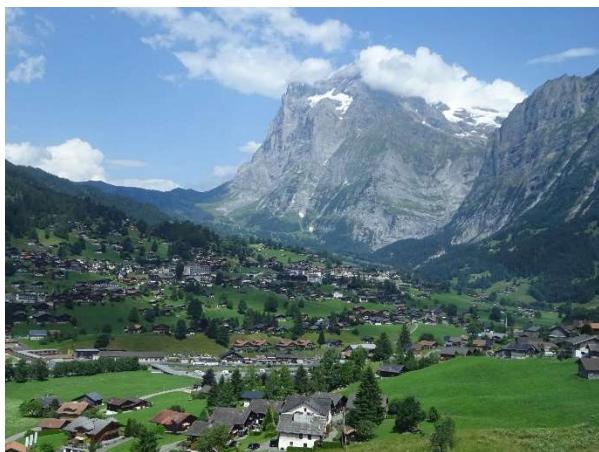
『雪原プラトーからのスフィンクス展望台』

なんらかの措置があったようで、別の階段に移動し、やっとポストのあるフロアへ。そういえばパスポートに記念スタンプを押す箇所があった…を思い出し、押してきた。

電車の停まる場所に進んでも、ここはここで情報が交錯しているようだった。韓国からの団体と揉み合いながら、遅れての電車には乗れた。

戻りは、途中のアイガーゲレッチャー2320mで下車。2020年に開通したアイガーエクスプレスに乗り継ぎする。ここにも、リントの店があった。さつきの展望台では買うどころではなかったので、「イスに行ってきました」風の外装のを3箱買う。

26人乗りのゴンドラは大きい。結局、グループ別に、空席を残したままで発車していく。グリンデルワルトへは15分でつながり、そこまでガラス張りの大展望だ。まずは右手に、間近に迫るアイガーの北壁。下には、広い斜面にハイキング路が見える。何より、グリンデルワルトののどかな谷が魅力的だ。ヴェッターホルンがU字のカーブで迫っていて、それはスイスの典型的な写真になっている通りだ。



《ヴェッターホルンとグリンデルワルト》

グリンデルワルト・ターミナルからバスに乗り、また、ラウターブルンネンへ。シュタウプバッハの滝へは徒歩15分とあったが、コバさんは、最奥の駐車場まではバスを入れてくれた。そこから滝は間近で、落差287mの滝は、この谷に掛かる70いくつの滝でも特に勇壮とある。文豪ゲーテが感動し、詩の着想を得て…まあまあ。

送ってもらえた分、かえって戻りのラウターブルンネンの駅舎までを長く感じた。地下道をくぐり、またプラットフォームに並ぶ。

ここでの大一回りをやって、電車、バス、ゴンドラが実にうまく繋がることと、登山電車が堅実で安定した乗り物であって、乗車率世界一になる意味がよく判ったのだった。

ヴェンゲン駅から、ホテルへの坂を上がる。今日は、このホテルでの夕食だ。明日は、もうチューリッヒから帰国便に乗るから、最後の晚餐なのであった。



《ホテルでの最後の晚餐》

2つのテーブルに分かれて座り、ホテル仕様のメニューをいただく。サラダに乗るマッシュポテトもいかにもホテルらしいアレンジで、上品にナイフとフォークでいただく気になった。

少々はもうお別れの気分が漂う。

テニス仲間の女性ペアの片方は、直前に体調を崩し参加できるかギリギリだったが来れてよかったですと言った。もう片方は停年が2度延びて、ようやくの実現。結果、今はブー太郎で、帰国してから今後を考えよう…なのだと言った。私達は山友達同士であること。私は2回目で、ある種のリベンジ、トッコさんはそれこそ「2日しかなかったから、突然決まったスイス」と説明した。歳の差夫婦の方は、この時も延々と、元職場の上司で、夫の両親がやっと山を止めて身を固めてくれるかと喜んで…が始まっていた。

リゾートホテルに泊まるからといって、極上のサービスを受けて優雅な時間を過ごし、あたらずさわらざの相応の話題を見つけて、会話を楽しむ…には、まだまだ素養と経験がない。

今日は演奏者が、エレクトーンで演奏している。三人組さんがスカートを履いて来たうえ、曲を頼んで、盛んに「踊ろうよ」をやっている。その意味では私達は、金沢の山猿だった。なんで山にスカートを持ってくるの?えっ、踊るの?でいた。刺激されたというより、困惑した。トッコさんは琵琶で、私は篠笛で…邦楽なら、少しは判りたいと思うのだが。

残り時間にどんな教養をつけるか?そもそも、残りの人生をそう舵取りしていくか?まだまだ迷い続けることだろう。

◆7月4日（金） ヴェンゲン～ベニーゲン～
ブリエンツ～チューリッヒ～ドバイ
7時にロビーにトランクを出し、レストランへ。
今朝も、藤田青年はチケット押さえに先行し、客は各自で7時55分にヴェンゲン駅での集合だった。
これは結構、自立したお客様への指示である。

そういえば、大昔、呉服屋企画での「ロマンチック街道」と「プラハの旅」に参加したことがある。着物姿でコンサートに参加などのシーンが3回ほど入っていて、面白い趣向ではあった。従業員の慰安旅行も兼ねていて、彼や彼女らが着付けを手伝いつつの添乗役でもあった。変わり者店主も、羽織袴を着こなし、和服姿御一行様をやつたのだ。

でも、外国に不慣れな従業員だけでは手が回るはずもなく、なぜか客の私（若かった）まで、着付けも、トランク運びも、手伝う羽目になった。というのも、大店の大奥様方が「私は、Aの3なんだけど…」という具合で、座席すら自分で探す気がなかったからだ。従業員が何事にも気を回すものであって、悠然と指示を待つのがそんな御身分の方々だった。

今回のお客様は、みな100万円近くを払っている御身分だけれど、みなさん自分のことは自分でやり、時計を見計らって動き、離れた集合地へも行ける方々だった。「朝の集合は、駅で」が結構あったので、かえって、ああいう依存心一杯だったら、どうなるものやら？と、思い出してしまった。

富裕層なら、執事や召使やらが動くのだろう。リゾートとは、そういった桁違いの富裕層や貴族が、たっぷりのサービスを受け、豊かさを味わう場所だった。ひいては観光地となり、観光産業を作っていたのだ。



《スフィンクス展望台からの雪原プラトー》

雨がぽつぽつ降って来た。傘を広げて、ヴェンゲン駅に下り、トランクを確かめ…が、届いていない。ホテルからのゴーカートが来ていない。藤田青年、慌てて駆け上がっていったが、電車の出発には間に合った。

ラウターブルンネン駅からは、バスに乗る。雨のインターラーケンへ。ベルナーオーバーラントの交通の拠点が、インターラーケン。トゥーン湖と、ブリエンツ湖の二つの「湖の間」の意味。これで、ほぼ、スイスアルプスがらみの地名の場所が判った。ここは大津市と姉妹都市なのだそうだ。そして、ユングフラウ地方への玄関にあたる。



《ベニーゲンの観光馬車》

ブリエンツ湖のベニーゲンから、ブリエンツまではクルーズ。始発のベニーゲンでは観光馬車を見た。ちらっとだけだったが、このスピードや視点で、観光地を見ないと、ここが判らないかも…と、「カポ、カポ」と優雅な蹄鉄の音を聞いていた。

美しいエメラルドグリーンの色は、雨天では見られない。周囲の山も、雲が垂れて見えない。まあ、山で晴れててくれたんだから、これくらいはいい。

なぜ1時間もかかるの？は、これまた、湖をジグザグに、対岸から対岸への進み方をするからだった。着いた先のブリエンツは木彌りで有名な街で、さらにはここから出発のブリエンツ・ロートホルン鉄道というのが、蒸気機関車を使い、湖を見下ろす景色で有名なのだった。

それ以上に、今は例の『愛の不時着』ロケ地として、ホテルや桟橋が有名になっているらしい。

そんな有名は止めてほしい。景色が綺麗とか、歴史の舞台になったとかならまだしも、その手の「キヤー」の押し付けは迷惑だ。軽薄短小になっていく

ばかり…でも、客が来てくれればいいわけで、そうなる方が経済ファーストの時代には正解で…。呆れた後で、老兵は消え去るのみ…を思うわけだ。

あとはひたすらチューリッヒへ。途中のルツェルンは、「瀕死のライオン像」がある街。

藤田青年は、調べてきたスイスの話はみんな話しておかねばとばかり、傭兵の話も始める。

自給自足をやれども、現金収入は必要で、それが、スイスの場合、傭兵という出稼ぎだった。フランス国民が見限っても、最後までルイ16世を警護し、果てるしかなかった。ライオン像は、傭兵達の悲哀を偲ぶ慰靈碑だ。そんな傭兵の伝統が、今もバチカンに残っている。あの、ダ・ヴィンチがデザインした派手な守衛服を着られるのは、スイス人だけなのだという。スイス人の年収は1300万円あたりだが、名誉職ゆえ月収20万円でも、バチカン守衛は人気があるらしい。

次は地層。G.E.でも見たような石灰岩層。それはスイス西部のフランスとの国境地帯にも広がり、ジュラ山脈と呼ばれる。ジュラシックパークのジュラ、つまりは「ジュラ紀」は、そこが由来だ。石灰質は農地としては利用しにくく、牧草地となり、酪農が発展していった。地質、風土、暮らし、産業、歴史は関連しているものだが、これ以上は頭に入らない。

お時間となり、空港に着いてからの手順あれこれの説明に移っていった。



《シラタマソウ（マンテマの仲間）》

12時30分、空港着。女性日本人スタッフがサポートにつく。チェックインでトランクを預け、2枚のチケットを受け取る。関空行きになっているかを確かめ、座席番号を藤田青年に伝える。手荷物検査までにペットボトルを始末し、通過したら、出発ゲ

ートと時刻を確認し、エスカレータを2つ経由して、別の棟の搭乗エリアへ（そうメモしてある）。

再集合はしないが、藤田青年の点呼を経て搭乗へ。

搭乗エリアに着き、ホッとした途端、お腹が空いた…になり、寿司の看板が目についた。食にはずっと満足感がないので、「『スイスで寿司』の物好きをやるか？」と、足を止めたが、注文の段階では、ラーメンに変えた。片言で注文し、ニンニクのきついのを、それでも、お腹に収まる気になって食べた。それが、30CHF。つまりは5758円だった。生涯MAXの値段のラーメン！物価高スイス！

◆エピローグ

ドバイ着は23時36分。乗り継ぎ移動にまた緊張する。ろくに座る席のないゲートで待つ。

5日3時発の予定だった。それが折り返しの飛行機が遅れ、さらに遅れて、関空着見込み時刻18時40分では、予約電車には間に合わない！になった。

藤田青年は、スマホとタブレットを使い、第1案、第2案を書き出してくれた。7月5日23時25分金沢着で、旅は終わった。

7月の金沢は、1か月全部が真夏日となった。熱帯夜も20日。「外出を控えて」の通り、外へ出る気がしない。その分、紀行が渉ったかといえば…。

観光スイスとなれば、今度は資料が多すぎ。この際、きちんと調べてある程度を書き記しておこうと思う反面、すぐ検索できる時代であるから、どの程度まで？の迷いも生じてしまった。



《雪原プラトーからユングフラウ》

私の紀行は、まずできるだけ思い出して書き、その後、くどい箇所や、重複箇所を削るやり方…。読

み直し段階で、かなりを削った。加齢した分、あれこれ思い出すことは増えたが、多くを脱線にすぎないと却下した。

2回目の旅が出来たのは良かった。余裕がある分、いろいろが繋がった。人も国も、今だけではなく、さらに生き続けなければならない。スイスの生き様みたいのが、より見えたように思えた。

7月25日、2024年度の日本人の平均寿命が発表された。まさにその87.13歳で、7月15日に夫の長兄の兄嫁が亡くなった。アドバイス通り、緩和ケアのみとしたから、片付けがやれ、2度の旅行もでき、穏やかに終焉できたらしい。

グループホームの職場には、6月からミャンマーの技能実習生が配属され、手不足が一段落した。一方、日本人新職員の方は5か月で辞め、私より後に就職した人も、半月後には消える。先月来たばかりの経験者がもう「辞めたい」を漏らしている。

技能実習生側は、受け入れ条件の規定があり、外部視線があるから、条件は守られる。対し、日本人側は、サービス残業が当たり前だ。「仕方がない」と「要領が悪い」で済まされ、労使双方の交渉役などいない。我慢か？辞めるか？になる。

ちなみに、私の雇用条件は、一見時給が上がったが、その分時間外加算は減らされ、一日分総額は変わらずだ。「これはミスですか？」に対し、課長は「有休の時には、手取りが増える配分になるわけだから、得になるでしょう」という言い方をした。なるほど、現場が気付かぬ素振りで仕事の押し付け合いになっていくのは当然だ。相応に手抜きをして、溜飲を下げ、自分で実質時給を上げる解決をする…になる。

政府から施設に出た、介護職員の待遇改善手当は、いったいどこに回ったのだろう。

認知症という老後には、本音と建前の違いが露骨に出る。「認知症は病気ではない」と美辞麗句で飾りつつ、介護労働自体は、低賃金で（女性に）押し付ける。そもそもが、「介護は嫁がタダでやっていた雑務」の概念があり、介護の労働環境はブラックであり続けることだろう。

週3日の勤務という形態に、「生きている=働く」が信条の74歳の私は、納得してはいるが、だから

といって、相手に都合のいい人でいる気まではない。家から5分で、通い易い…などの総合判定で決めていこうと思う。

それでも、タダ働きの嫁よりは、常にマシにはなるであろう…。



《タマシャジン》

結局は、健康寿命を延ばし、行きたい所へは行き、見たい物は見たうえで、速やかに天寿として去るがよしだ。

8月1日で2歳になった羽花の、成長ぶりには目を見張るばかりだ。

この新鮮で真っ当な命を見て、堂々巡りばあ様は、しょせん、無駄心を使っているにすぎない…と思う。「責任が終わった人」は、ペースを落としつつ、満足心を養っていこう。

37度予報の今日も…まずは、働きに行くか！

—完—



《タマキンバエ》